

「遊佐町・食べる手・作る手・つないで食の再興計画」

飼料用米が
日本の食卓を救う

僕たちの
食べているのが
飼料用米です



生産者と消費者の提携が 育んだ飼料用米

JA庄内みどり遊佐営農課
那須 耕司

生活クラブとの提携の歴史

- 1971年 食管法の基、ササニシキ 3,000俵から生活クラブとの提携が始まる。
- 1974年 第1回庄内交流会、農協婦人部で石けん運動がスタート。
- 1988年 共同開発米の取り組みがスタート（品種・農法・価格・食べ方等全般に渡り、生産者と消費者が直接話し合いで創りあげる。）
- 1990年 アルミ再処理工場移転。生活クラブより支援カンパを環境基金として積立て。遊佐町で「月光川の清流を守る基本条例」が制定される。
- 1992年 共同開発米の価格決定に「生産原価保障方式」採用。
生活クラブでは米の登録制度による共同購入が実施される。
- 1993年 平成の大凶作の中「どんぶりーぱい運動」を展開し、生活クラブへ米を届ける。
- 1994年 独自の共済制度「共同開発米基金」を創設。
- 2004年 台風15号による潮風害で作況指数72。カンパ・激励の手紙に再起を誓う。
「飼料用米プロジェクト」スタート。
- 2005年 遊佐町全体で「GMOフリーゾーン宣言」
- 2006年 開発米部会員全員（483人）がエコファーマーを取得。
- 2008年 共同開発米はすべて「減農薬・減化学肥料栽培」へ。なたね栽培始まる。
- 2010年 太陽光発電システムを備えた遊佐中央カントリー稼働。
循環型肥料「遊佐づくし」試作。

遊佐町水田概況（平成24年度）

項目	面積 ha	数量（見込）	備考
総水田面積	3,102.3ha	156,319.0俵	米の総出荷数量

生活クラブ供給明細（園芸作物除く）

共同開発米	1,224.8ha	105,498.0俵	出荷数量全体の67.5%
雪化粧（酒米）	5.0ha	288.0俵	杉勇酒造
加工用米	16.3ha	100.0 t	青木味噌、小島米菓
大豆	322.3ha	347.0 t	青木味噌・タイハイ・カジノヤ 共生食品・京北食品
飼料用米	261.1ha	1,423.2 t	平田牧場
なたね	6.2ha	4.7 t	米澤製油
ソバ	33.5ha	12.4 t	おびなた
合計	1,869.2ha		総水田面積の60.3%

山形県遊佐町

地域に拡がる生産活動の輪



日本海

庄内浜砂丘



酒田市

山林

鳥海山

山林

山林



遊佐町耕作地表記

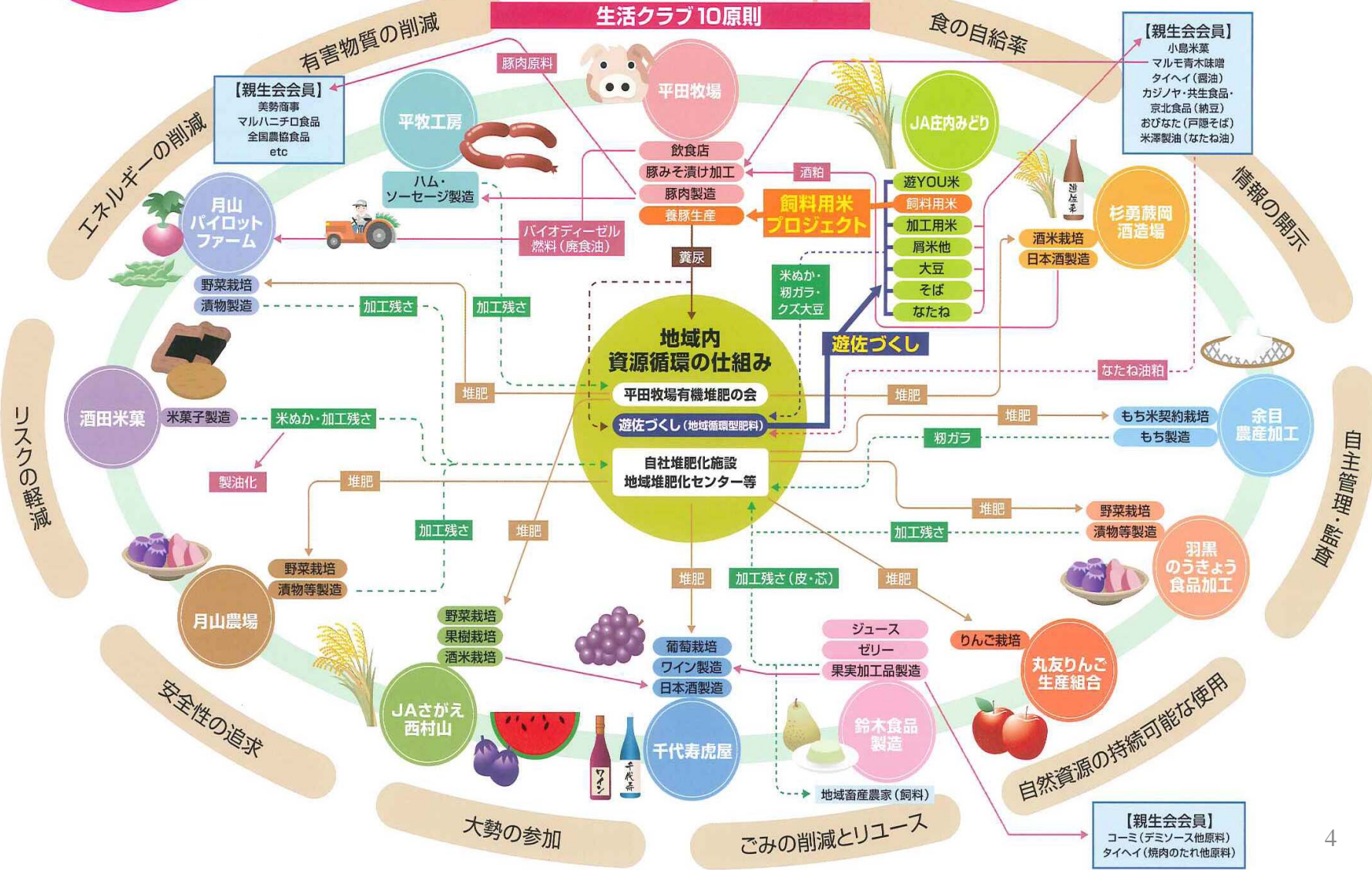
- 大豆
- ナタネ
- 飼料用米
- 遊You米
- 有機米(無農薬・無化学)

生活クラブ
山形親生会

自給・循環 私たちの取り組みです。

安全・健康・環境

生活クラブ10原則





原料の生産地にこだわり、できるかぎり地元産にこだわり、丁寧に
つくった有機質肥料ができました。

遊佐づくし肥料の特徴

- 動・植物質100%の発酵有機肥料（ボカシ肥料）
- 遊佐産原料70%の地域循環型肥料
- 生活クラブ親生会グループより素性の確かな原料使用

平成25年度配合予定

原料名	割合	産地
大豆	48%	遊佐産 70%
トンポスト	5%	
米糠	15%	
クン炭	1%	
カキガラ	1%	
骨粉	6%	丸善食品（生活クラブ親生会）
菜種粕	1%	米澤製油（非遺伝子組換え）
発酵鶏糞	6%	鹿川グリーンファーム(生活クラブ親生会)
焼鶏糞	16%	国産
魚粕	1%	国産

飼料用米プロジェクト体制

(2004年スタート時の体制、現在は食料自給率向上モデル事業へ)

構成団体

遊佐町
共同開発米部会
生活クラブ生協
平田牧場
全農庄内本部
JA庄内みどり
北日本くみあい
飼料

助言・指導

東北農業研究センター水田利用部
山形大学農学部
山形県酒田農業技術普及課

プロジェクトの事業内容

- ① 産地に適した飼料用米の品種選定
- ② 生産コスト削減並びに生産構造
改革の具体策
- ③ 家畜給飼における肉質の調査
並びに食味への影響
- ④ 飼料用米生産による国内自給率
向上効果の調査 等

飼料用米プロジェクトの意義・目的

- ◆ 日本の食料自給率の向上
- ◆ 農地（水田機能）の保全（耕作放棄地の解消）
- ◆ 大豆の連作障害の回避（新たな輪作体系の構築）
- ◆ 循環型農業の確立（耕畜連携による土づくり）
- ◆ 素性の確かな自給飼料生産
 - ⇒ **究極の NON・GMO 飼料**
- ◆ 安全でおいしい豚肉の供給
- ◆ トウモロコシ輸入代金の国内還流

関係機関が一つになったシステムの構築

飼料用米作付状況（遊佐町）

	人数	作付面積	生産量	収量 /10a	助成金単価 /10a	販売単価 /kg	全国作付 面積
2004年	21人	7.8ha	30.3 t	388kg	20,000	@40	44ha
2005年	38人	19.3ha	107.7 t	558kg	35,000	@40	45ha
2006年	111人	60.5ha	347.3 t	574kg	55,000	@40	104ha
2007年	230人	130.0ha	691.2 t	530kg	50,500	@46	292ha
2008年	286人	167.9ha	977.5 t	582kg	41,500	@46	1,611ha
2009年	341人	209.0ha	1,215.1 t	581kg	80,000	@46	4,129ha
2010年	374人	243.3ha	1,278.5 t	526kg	80,000	@36	14,883ha
2011年	435人	317.0ha	1,665.5 t	525kg	80,000	@36	33,955ha
2012年	389人	261.1ha	1,423.2 t	545kg	80,000	@32	34,525ha

※ 助成金には町・県独自の加算金も含まれます。

飼料用米をつくり続けるための課題

- ① 増収意欲の持てる補助金体系
 - ・ 収量に関係なく面積に対する一律助成
 - (例) 仮払 @10円 - 施設利用料 @21円 = **△11円**
- ② 長期展望に立った米政策
 - ・ 備蓄米・加工用米高騰で大豆・飼料用米離れ
- ③ 長期展望に立った体制整備
 - ・ 流通・保管施設
- ④ 生産者・畜産農家・消費者の理解と確実な消費

**生産者・畜産農家・消費者
のつながりを全国へ**

飼料用米生産ほ場

遊佐町
JA庄内みどり

